

派な洋間であつた。そのほかに、八疊の座敷、六疊づつの茶の間と子供部屋、三疊ぐらゐの女中部屋。簡素な洋風の食堂……。住宅拂底の満洲では、まづ相當の住居とみてよからう。茶の間は座敷とつゞいて、裏庭に面した南向の明るい部屋であつた。

主人の須藤豊彦氏は、とつくにセルのヒトへに着がへをすまし、時には讀書机にもなりチャブ臺にもなるシタンの机の向ふに、とつかとアグラをかき、その膝の上に五つになる男の子をすわらせて、子供と一しよに繪本を見てゐた。四十前後の肥つた人であつた。角ばつた顔は、いかつい感じであつたが、さすがに大病院の内科部長を勤める人だけの品位と重みは自然にそなはつてゐた。

「おかへりなさいませ」

と雅子が入つてゆくと、

「やあ、——さあ、どうぞ！」

と、氣さくに雅子を自分の向ふ側にすわらせて、

「いゝ陽氣になりましたね、こゝ一二ヶ月は満洲も極樂ですよ」

「ほんとに、それに日が永くて……」

「九時……九時半だな、暗くなるのは。いま五時半ぐらゐだが、ちやうど内地のオヤツの時間といふところだからな、陽の高さは」

「ほんとに、——でも、私、こんなに陽の高いうちに歸つたのは久しぶりですわ。——さういへば、部長先生も今日はお早かつたんですね？」

「なに、哈鐵(哈爾濱鐵道局の略)に、ちよつと用があつてね、家の方向に來たから、そのまゝ歸つたわけですが、——母ちやんのオヤツは、いつ出るのかな、ねえ、昇」

須藤内科部長は、その大きな手で膝の子の頭をなでた。母の喜代子によく似た色の白い、まる顔の、かはいゝ坊やであつた。

「昇ちゃん今日はバカにおとなしいのね、どうなさつて？」

「なあに、こいつ、いままで晝寝ひるねをしてゐたんですよ、そのすきにお姉さんと赤ちゃんあかちゃんが、ねえやにつれられて厚生會館こうせいかいに遊びに行つちやつたもんだから、ホンの今さきまで、グスグスぐすつてたんです」

「おやまあ、それはいけませんでしたわねえ、厚生會館では何があつてゐるんです、昇ちゃん？」

「シバイ、ニンギヤウシバイ……」と、その子が繪本をいぢくりながら答へた。

「ロシヤ人がやつてるんですよ、子供を集めて。ほら、やるぢやありませんか、人形にんぎょうを手にはめて、マリオネットとかいふんぢやないですか」

「手でやるのですと、たしかギニョールとかいふんぢやありませんかしら？」

「さうでせう、それですよ」

やつと喜代子夫人が、廣いお盆ぼんの上に、四人分の紅茶かうぢやと秋林アキリンのお菓子お菓子をのせて

両手でか、へて來た。昇は父の膝ひざをぬけ出して、すぐにその母にとびつき、ふところふところに手てを入れて、もうとつくに弟おとうとである赤ちゃんあかちゃんに譲つたはずの母の乳房ちちをさぐりはじめた。

「あれあれ、いやな昇ちゃん、またお里さとを思ひ出したのね！」

喜代子は口ではさういつたが、べつに子供を遠ざけようとはしなかつた。

雅子は知らぬふりをしてゐた。知らないふりで過すこすことが、自分の良心の痛みとならないかぎり、もうよその生活などにオセツカイはすまい、と心のうちで思つた。雅子の考へるところでは、やうやくの思ひで乳ちちばなれをした幼児が、なまじひ母の乳房ちちなどをもてあそぶと、再びそれへの未練みれんを呼び、ひいては小さいその弟なり妹なりへの嫉妬しつととなり、ひがみの因もとになるのではあるまいかと、それが氣づかはれたのであつたが……。

「ときに室伏先生」

と、一口す、つた紅茶を下において、須藤氏が雅子に話しかけた。

「あなたは、やはり遠からず東京に歸られるつもりですか」

「ええ、前任の先生が御歸還になるか、もしくは新しい後任の方がお見えになり次第、——勝手にすけれど」

「いや、それは最初ツから喜代子とのあひだの、いはば條件みたいなお約束だったといふし、僕もまた、それを承知の上で、むりやり来ていたゞいたんだから、それはまア覺悟はしてゐたわけだが、實のところ惜しいですよ。とても評判がいゝんだから……。ほんとうなんだよ、喜代子、室伏さんは實に評判がいゝんだ、病院の内外で」

「ええ、あたしもね、そのお噂をよく耳にするもんだから、とても鼻が高いんですよ」

「ウン、そりや僕も鼻は高いよ。なんせ、その頃しばらく僕は小児科の方にも顔

を出さなくちやならん立場にあつたので、内地では内科をやつてゐられたといふ室伏さんに、まア勉強のつもりでといふので、小児科で働いていたゞくことにしたわけだが、その後そつちの方も手がそろつたから、僕としては室伏さんに内科へ移つていたゞくつもりでゐたんだ。ところが小児科の連中が承知しないのさ。で、僕もまア腹の大きいところを見せる氣で、たつてとは言はなかつたんでな、小児科の連中も大いに僕を徳としてゐるといふやうなわけさ。はッはッは」

「でも、ほんとに惜しいことは惜しいわね、雅子さん、どうしても東京へ歸らなけやいけないの？」

「ええ、一年も家を離れてゐるとね、やつぱり氣にかゝつて……」

「氣にかゝるつたつて、もう弟さんも妹さんもみんな身を固めてらつしやるんだし……」

「だけと、その妹たちがね、今年は三人とも、どうやらおめでたらしいのよ、大

きい方の弟の嫁は二度目なだけけれど、あとの二人は初産なので、氣になりますわ」

「氣にするほどのこともないと思ふんだけどなア、よくしたもので、それこそ案ずるよりは生むが安しよ。早い話が、あたしをごらんない、これで三人の子のお母さんよ！ そりや不二子の時は東京だったから、母が萬事よろしくやつてくれたけど、昇と茂はハルビン生れよ」

「ええ、でも……。私ね、やかましく早婚の必要が叫ばれる時代に——そして二十年三十年後のお國のことを考へると、實際にその必要があると思はれるのに、かうして自分が老嬢でゐるんですから、せめて弟や妹たちに立派な赤ちやんを生んでもらひたいと思ふんですわ。きざなことをいふやうですけど、ほんとにさう思ひますの」

「ウム、それは立派な御意見だ！」

須藤氏が大ききうなづいたとたんに、

「あ、あなたッ、またタバコの火を！ 今年こさへたばかりの着物に！ だめぢやありませんかッ」

喜代子夫人は、いさゝか鼻にかゝる甲高い聲で、病院でも利け者の内科部長の旦那さまを、めツと睨みつけた。

「やあ、こいつあ、しまつた！」

内科部長は、あわててその大きな手でセルの膝をなでながら、

「やれやれ、これでユカタが出るまでは當分また毎日おこごとか！」と笑つた。

しかし、そのかはいらしい奥さんは、ニコリともしないで、

「ほんとにしやうのない方！」

と、露骨に不機嫌な顔をして、なほも睨むやうに主人の顔を見つめてゐた。

さういふ顔をしててもチツトもこわくは見えないで、かへつて愛らしく見える昔の學友の、堂に入つた世話女房ぶりを、雅子は微笑をもつて眺めた。

こゝにも自分にふさはしい夫を得て、満ちたりてゐる女がある！

さう思ひ、そのことに自分も喜びを感じながら、心の一方では、

——さあ、今夜はひとつ、こないだ線の並木路で考へたことを、くはしく手紙に書いて、あの敏感な弟に首をかしげさせようかな。

などと考へてゐた。

雅子は、しかし、すぐ気がついて、

「あ、部長先生！ なにか私に御用とおつしやるのは……？」

と、しづかに目を夫人の方から須藤氏の方に移した。

「おゝさうさう、實はあなたに御相談があつたんだ」

須藤氏の方でも、すぐ長上の人らしい、おちつきをとりもとして、

「だしぬけですが、あなた厚生列車に乗つてみる氣はありませんか、ホンの四五日でいゝんだが、——？」

と、まつすぐに雅子の顔を見た。

「厚生列車と申しますと？」

「ごぞんじないですか、實は満鐵でもう十年……いや十數年も前から毎年やつてきてゐるんですが、山間僻地や遠い國境地帯の不便不自由なところで働いてゐる沿線の住民や軍隊や警察隊、鐵道従業員、その家族、さういふ人々の苦勞を慰問し激勵するために、非常な費用をかけて特別の列車を運轉してゐるんですが」

「あゝ、ちや、あの慰安列車とかいふ……？」

「さうさう、その慰安列車だ、昨年まではさう呼んでゐたんだが、この事業の使命なり目的なりといふものは、かならずしも單なる慰安だけにあるんぢやない、むしろ、もつと大きな文化的政治的あるひは國策的な意味があるんだといふので、

さういふ名に改められたわけですな。——で、その厚生列車には、施療班もしくは医療班と呼んで、醫師や薬剤師や、それから看護婦なんかも乗るんでね、毎年われわれの病院の方からも交替で出てゐるわけですが、今年は運わるく急に手違ひが出来て——といつても、さきにきまつてゐた人は親御さんの病氣で歸郷、そのかはりを頼むつもりでゐた人が、こんどは急に應召、どちらにも已むを得ない事情ですが、——とにかく、わづか四五日のところだけと、そのコースだけは人選の都合がつかないでね、ちよつと弱つてゐるんですよ。——どうでせう、室伏さん、経験のためにも、ひとつあなたに御奮發していただきませんか、僕を助けると思つて」

須藤氏はさういつて、また、まつすぐに雅子の顔を見つめた。

## 厚生列車

十一時の夜行でハルビンを立つて、あくる日の午後三時すぎ孫吳についた。

その驛のフォームの一つに、車體を滿洲國の國旗とおなじ色に塗りたてた十六輛連結の豪華な列車が、いかにも晴がましい姿で停つてゐるのが見えた。間ふまでもなく、それが厚生列車であるにちがひなかつた。

しかし、雅子は、プラットフォームに降りると、ちやうどそこに、協和服の胸に桃色の大きな花の徽章をつけた青年が立つてゐたので、

「厚生列車の方でせうか」

と、たづねてみた。

そのとほりであつた。さし出された大形の名刺によつて、その青年が厚生列車

の総務長の秋永四郎であることもわかった。雅子は総務長の若さに驚いた。眼鏡の奥に柔和な目を光らせた小柄の青年であつた。三十にはまだ間がありさうであつた。

「では、御案内ませう」

若い総務長は、あいさつがすむと、さつそく雅子がさげてゐるポストンバックをとり上げて、さきに立つて歩きだした。歩きながら話しかけた。

「室伏さん……でしたね？ 建設線へも行つていたゞけるんでせうな？」

「建設線といひますと？」

「つまり新しく建設される工事中の線なんです、僕たちこの北黒線コースは、明日つぎの環環をすますと、明後日のうちに神武屯と黄金子を一日にすまして、一気に黒河まで行つて終了といふわけなんです。さうすると、それから二日間ほど山神府の今いふその建設線へまはることになつてゐるんですがね」

「あゝ、ちや、私、そちらへもまゐるわけですが、なんでも今日のうちに厚生列車に乗りこんでおいて、明日から七月二日までの四日間だけ、是非お手つだひをするやうにといはれて、なんにもわからずにまゐつたんですから、——ほんとにお役に立てるかどうか、怪しいもんですわ」

「いやいや、そんなこと……」

厚生列車の前についた。昇降段の一番下の段は地上より二尺以上も高いので、雅子は、それを上るのに、ちよつとお行儀のわるい恰好をしなくてはならなかつた。乗車して通路を左へ行くと、入口から二番目が総務班の室だつた。コンパートになつてゐて兩側に二段づつの寢臺があり、そのあひだに大きな机がおかれてあつた。総務長の秋永青年は、雅子のポストンバックを、その机のわきにおくと、「ちや、とにかく食堂へ御案内して、お疲れでせうから、お茶でも飲みながらお打合せませう」

と、また先に立つて歩きだした。

寢臺車の次の車は疊敷で、タテに長い十四疊敷の部屋であつた。一方の窓ぎは通路があり、奥には小さい舞臺があつた。疊の上には、蓄音機、碁盤、將棋盤、コリントゲームなどがおかれてある。天井からくす玉がさがり、窓々には花が飾られてあつた。華かな氣持のよい室であつた。

「娛樂室です、開催中その地の人々のために開放するわけですが、雨の日などには、映畫も演藝もこゝでやります」と

と總務長が説明した。

そのつぎが食堂車、こゝも乗組員の食事時間以外は、その地の人々に開放するのださうで、ちやうど日本の兵隊さんや義勇隊の青年たちが来て、紅茶をのんだり、ライスカレーを食べたりしてゐた。

こゝにも繪や花が飾られ、天井にはくす玉がチラチラと光り揺れてゐた。

總務長と雅子は空席を見つけて、向ひあひにけかた。

「室伏さん、代表にはね、あとで御紹介しますが、實は建設線に入ると、代表と總務長だけはハルビンの建設事務所から出ることになつてゐるんです。僕たち哈鐵（哈爾濱鐵道局）のものなんですから、僕たちは明日まで、明後日の朝には新しい代表や總務長と交替することになつてゐます。それで……」

「あら、ちや、交替して、明後日の朝はもうお歸りになるんですの？」

「いえ、さうぢやありません、建設線のあひだだけ交替するので、建設線がをばると、厚生列車は綏化まで廻送して、それから綏佳線コースに入ります。そのコースにつづけて僕が乗ることになるかどうか、それは命令が來てみなければわかりませんが、とにかく綏化までは僕がやるんですから、どうぞよろしくお願ひします。そして何か御不自由なことでもあつたら、どうぞ御遠慮なくおつしやつて下さい」



「ありがたうございます。こちらこそ、どうぞよろしく」

食堂には女學校を出たばかりの二人の給仕がゐた。乗組員たちは彼女等をお嬢さんと呼んだ。お嬢さんの一人によつて、二人の前に紅茶が運ばれた。

雅子の席からは通路をへだてた筋向ひの卓子に、こちらには背を向けて二人の女が、これも紅茶を飲んでゐた。うしろ姿で見ると、どちらも相當の年配らしかつたが、その二人の前にかけてゐる娘は、まだ十六七の少女であつた。さつきから雅子の方を、しきりにジロジロと見てゐたが、この時、つと立ちあがつて、總務長のそばに來た。ワンピース……などと、もつたいらしくいふよりも、アツバツバと呼ぶにふさはしい、かんたんな洋服を着て、素足にスリッパをつつかけてゐた。ガラガラした聲で總務長に話しかけた。

「總務長さん、私たち今日はもうこれから何にもしないの？」

「あ、今日はもう、さつきなのでおしまひだ。ここんとこすつと、すいぶん頑張つ

てもらつたからな。——そのかはりな、良枝ちゃん、明日の瓊瑛は、しつかり踊るんだせ、明日はきつと日本の兵隊さんも大せい來ると思ふから」

「あらさう、うれしいわ、しつかりやるわ。私たち、やつぱり日本の人が大せい來てくれなげやつまんないわ、いつも満人の人ばかりぢや」

「そんなことがあるもんか、満人の人たちにだつて、しつかり踊つて見せてやらなくツちや」

「ええ、そりや私たち踊だからい、わ、——けど、春風さん、こぼしてたわ、いくらおれ達が生懸命やつても、満人には日本のマンザイがわからねえから、つまんねえつて」

雅子は、そのガラガラ聲の少女の、品はないけれども、いかにも子供ッぽい様子に、つい微笑しながら、

「演藝の人ですか？」

と總務長に聞いた。

「ええ、日人演藝班の大木良枝ちゃんです、はるばる淺草から來てゐるんですよ。

——おい、良枝ちゃん、こちらはね、今日わざわざハルビンの病院から來て下さつたお医者さまだよ」

「あら、お医者さま？ あらア。い、わア」

なにが「い、わア」なのか、踊子の大木良枝は、胸をそらして、その胸に両手をやつた。

總務長がまた雅子に話しかけた。

「この北黒線コースの代表は、滿人で、やはり哈鐵の××係長をやつてゐる王さんて方ですがね、とても養生家で、用のないかぎり毎日、一定の時間に晝寝をやるんですよ、いまちやうど、その午睡の時間ですから、御紹介はあとまはしにして、ひととほり厚生列車を御案内させようか」

「ええ、どうぞ、お願いしますわ」

雅子が腰を浮かしかけると、良枝が、

「總務長さん、私も行つてい、？ 私だつて御案内できるわよ、總務長さんよりたくさん乗つてるから」

「こいつ、——い、よ、おいで」

三人で食堂を出た。

すれちがひに、とても柄の大きい空色の縞のユカタに、黄いろの、しぼりの帯をした美しい女が、乗組員らしい五六人の男と一しよに食堂に入った。ちよつと目立つ女であつた。

「やはり日人演藝班の大木美鳥さん、良枝ちゃんの姉さんで、やはり淺草か、てゐるんです」

と總務長がいつた。

娯樂室の昇降口から、さつき入ったフォームとは反対側のフォームに下りた。國民學校の運動會でもやれさうな、廣々としたフォームであつた。かんかんと北満の太陽が照りつづけてゐた。

雅子は、麻地でつくつた簡素な夏のブラウスを着て來たことを、よかつたと思つた。

機關車のつぎから、順に、貨車が四臺、これに販賣車で賣る品物が満載されてゐる。

つぎが診療車、一臺。こゝが雅子の明日から四日間の職場であつた。診療臺、机、手術用寢臺車、藥品戸棚、その他。普通の病院の診療室と薬局を小型にして一つにしたやうなもので、ひととはり設備はそろつてゐた。おまけに室の一隅に衛立があつて、そこに三人分の寢臺があり、醫師と藥劑師と事務員の寢室にあてられてゐた。

雅子は、こゝで藥劑師や事務員と挨拶をかはした。むろん、二人とも男であつた。

「王先生が室伏先生に、くれぐれもよろしくつて、さういつて、さつきのハルビン行で歸られました。ハルビンへついたらすぐ、まつすぐに山東の方へ歸られるはずですよ」

と藥劑師の塚本青年がいつた。

「さうさう、王先生、とても感激してゐましたよ、建設線までは行けないにしても、せめて明日一日で終る北黒線コースだけでも責任を果して歸りたいと言つてられたんですが、あなたが今日こゝにつかれるといふ電報だつたもんですから、僕と塚本さんが無理にすゝめて歸らして上げたんですよ。どうぞ室伏先生によろしくつて、涙を流して喜んでゐられました」

と事務員の栗原青年もいつた。

あ、それでは私がこゝへ来たのも、やはり無駄ではなかった、と雅子は思ひ、どうぞ、その親孝行な満人青年醫師が、病める老父の息のあるうちに、故郷の山東に歸りつきますやうにと、いまはそれを祈つた。

「ところで」

と總務長が事務員にいつた。

「ねえ、栗原さん、室伏さんの寢臺のことですが、どうしませうな、いままでと男の方と女の方の数が逆になつたわけですが？」

「さうですね、なんなら、僕たちが看護婦さんたちの室に移つて、こゝに先生と看護婦さん二人に来ていたゞいてもいゝですが、——しかし、ごそんじのやうに、この車だけは、ほかのと違つて、いちいち外へ下りなげや、ほかの車に行けませんからね、進行中は全くの離れ小島で、困ることがありますよ」

「進行中だけぢやないよ、停車中だつて、山間の小驛なんかで夜中に雨に降られ

たりしようもんなら、男の僕たちだつて困るくらゐだから、女の方にはどうかかなア。——寢臺、いま満員なんですか」

總務長が樂劑師に答へる前に、

「ねッ、總務長さん」

と、踊子の良枝が横から口を出した。

「室伏先生を私たちのお部屋にお泊めしたらどう？ 私たちんとこ四人しきやもないのに、疊が六枚も敷かつてんだから、大丈夫よ」

「ウン、そいつは名案だな、ちや、先生には失禮だから、若い方の看護婦さんに四日のあひだ、良枝ちゃんたちのところで辛抱してもらふことにするか」

「つままないわ、そいぢや……。先生の方がいゝわよ、さうすれば私たち、先生を私たちのお客さまにして、よくサーヴィスして上げるわ。——ねえ、先生！」

「ホ、。私、どこだつていゝわ」

雅子は笑ひながら少女の踊子に答へた。

「まア何とかなるだらう、——さあ、つぎを御案内しませう」

三人——総務長と雅子と踊子は診療車を出た。

つぎの二輛が販賣車。雅子は、そこで賣られてゐる品の豊富さに驚いた。それは都會の百貨店を列車の中に縮少してゐると言つてよかつた。衣類、雜貨、化粧品、菓子、罐詰、酒、ビール、醬油……靴に下駄に帽子にトランク。洋傘に、からかさ。——お角力さんの形をしたセトモノの貯金壺まであつた。

販賣班員は日滿の青年たちで、滿鐵生計組合の人々であつた。

さて、つぎの一輛が幹部の寢臺車。そこは一室づつにしきられてゐた。順に、代表、愛路班、看護婦、日人演藝班婦人部、總務部、庶務連絡部等の七室。そのうち日人演藝班婦人部室だけが疊敷であつた。

娯樂車、食堂車、調理場と食糧倉庫、それぞれ一輛づつ。

疊敷の寢臺車が二輛。まん中の通路をはさんで兩側に一人一枚づつの割で、すらりとしきられてあつた。この二輛と娯樂室とに前に記した以外の乗組員の全部が寢起きする。日人も滿人も白系ロシア人も……。

發電車、車掌車、これまた一輛づつ。

「まア、ざつとこんなものです」

「なかなかうまく出来てゐますのね！——けど、さうしますと、乗組員の構成はどういふことになつてますの？」

「乗組員は、——運轉手、機關手等の乗務員は別として、まづ代表が一人、これが全乗組員を統率するわけです。その下に總務長一人、代表の命をうけて、全員の指揮と連絡にあたります。それから仕事の分擔は、總務、庶務、販賣、診療、娯樂、食堂、愛路の七班で、各班に班長一名をおき、その班を統率します。コースによつて警乗兵が乗ります。——先生は、いふまでもなく診療班の班長です」

「たいへんですわ、私なんかにも動まるのかしら、ほんとに私あんまり軽はずみにおひきうけしちやつて……」

「そんなことないですよ、大丈夫です」

「それに、一ヶ所一回づつの治療で癒るやうな病氣の患者ばかりならいゝけれど……」

「いや、それはね、最初のうち、どのお医者さんも氣になさることなんです。」

——實際、治療といふことだけに目をおいて考へると、おそらく醫師の立場からは、この厚生列車の事業そのものに疑問を起されることもあるだらうと思ひます。治療としては、それこそ二階から目薬みたいなことになりませうからね。——けど、そこを政治的に、あるひは民族協和といふ觀點から考へてみるんですわ。なにしろ、厚生列車の行く部落々々には、生れてからまだ映書を見たこともない人間や、病氣になつても醫者とは考へないで、祈禱だのオマジナヒだのにたよらう

とするやうな人間が多いんです。むしろ、そんな人間ばかりだといつていゝんです」

「ええ、それはわかりますけど、でも、かういふことはありませんかしら？ いま、あなたのおつしやるやうな人たちがですわ、たゞで病氣がみてもらへて、たゞで薬がもらへると聞いて、やつて來ませう？ けど、さういふ病人を一回ぐらゐの治療や一服や二服の薬で癒せるものではありませんわ、でも、さういふ人たちは、おそらく醫師や薬に對して非常な期待を……ひよつとしたら奇蹟をさへ期待して來るのぢやないかと思ひますわ。ですから、なまはんかなことをしてゐると厚生列車の目的からいつて、かへつて逆の結果になるんぢやないかと私さう思ふんですけど、そんなことありませんかしら？」

「それはまア大体において、まづないし見ていゝでせうね」  
若い總務長のあまりにも無造作な斷定的な返事に、雅子は、むしろ、呆氣にと

られたかたちで、自分と丈の高さもあまり變らない小柄の青年の、いつたい、どこからそのやうな確信が出るのであらうと思ひ、われしらす相手の顔を見かへした。——踊子の良枝は、いつのまにか姿を消して、二人は、後尾の發電車から逆に各車を通つて、この時ちやうと總務室の前まで來てゐたのであつたが、そこまゝで來ると、

「ぢや、寢室のことは、總務部で何とか考へて、あとでお知らせしますから、お疲れでせうし、ひとまづ看護婦さんの室で、どうぞ、お休み下さい」

總務長がいつた。

雅子が、それではとポストンバックと手提カバンをとり、總務室に入らうとすると、そのとなりの室から良枝が顔を出して、

「先生、こつちよ、こつちよ！ 先生のお荷物はこつちよ！」  
と、さかんに手まねきをした。

その日の厚生列車は、——すでに雅子がつく前に、愛路大會も診療も販賣も演藝もをはつてゐたので、若い乗組員と、滿蒙開拓青年義勇隊孫吳訓練所の青年たちのあひだに、野球の仕合を行つただけで、夜を迎へた。

あくる朝、厚生列車は、擴聲機でレコードの滿鐵行進歌を高らかにかき鳴らしながら、その五色の旗の色にいろどられた豪華な姿で、環翠驛のホームにすべりこんだ。窓といふ窓からは乗組員が顔を出して、日滿の小旗をうち振つてゐた。

日滿の小旗はホームでも振られてゐる。教師に引率された國民學校の子供たち。愛路村の人々、近傍の部落民……。

驛長以下の鐵道従業員たちは、二列横隊に列を正し、擧手の禮をもつて列車を迎へた。

列車が停る。代表が總務長をしたがへて列車を降りる。迎へに出てゐる人々と

代表のあひだに挨拶がかはされる。

満人演藝班員の一人が、ガランガランと鐘を振りながら、驛構内に鐵道の枕木を積みかさねてこさへられた露天の舞臺に立つ。人々は忽ちゾロゾロと舞臺のまはりを埋める。驛構内も廣いが、その外まはりは見わたすかぎりの曠野である。部落らしい人家は見えぬ。けれども、驛の外にはアンペラの幌馬車が二十臺も停つてゐる。五里十里の遠い部落々々から、一家眷族さそひあはせて、厚生列車を見に集つた人々である。

満人藝人は旗を振りながら愛路の歌をうたふ、子供等がつけて歌ふ。大人も眞似る。代表が舞臺に立つ。この北滿の僻遠の地で王土樂土建設のためにいそしむ人々の勞をねぎらひ、時局を説き、一段の自愛と奮闘を祈つて、舞臺を降りる。愛路班長が立つて、鐵路を愛護せよと説き、防共を叫び、民族協和をたゞへる。愛路につくした村民に對する表彰が行はれて、愛路の會がすむ。満人の演藝がは

じまる。曲藝。支那マンザイ。手品。歌……。

露天の舞臺をとりかこんだ夥しい満人の中に、いくらか日本の人の姿も見える。モンベ姿の開拓地の女、義勇隊の青年たち、鐵道従業員の妻子、北方を守る兵たち……。

満人藝人にかはつて、日人演藝班が舞臺に立つ。

大木美鳥と良枝の舞踊。國民進軍歌、山寺の和尚さん、春雨、築地明石町、お江戸日本橋。奥さんの夢……。

つづいて柳家春風夫婦のマンザイと、寸劇。

少い日人のためには娯樂車で映畫がはじまる。多い満人は日が暮れるまでの、ごしんばう……。

販賣車が扉をひらく。

いそげ、いそげ、おらのところは醬油が切れた。おらのところはタバコがねえ。



少(シヤオ)孩(ハイ)にはお角(カク)力(リキ)さんの貯(チ)金(キン)壺(ヒヤウ)、姑(オウ)娘(ニヤン)には日本(ニッポン)の繪(エ)日(ニチ)傘(サン)。  
診(シ)療(リョウ)車(クルマ)も受(ウケ)付(ツキ)開(カイ)始(シ)。

診(シ)療(リョウ)を求(モト)めるのは十(ジュウ)人のうち九(ク)人(ニン)まで満(マン)人(ジン)で、あらかじめ愛(アイ)路(ロ)班(バン)のものから配(クワイ)られた無(ム)料(リョウ)診(シ)療(リョウ)券(ケン)を持(モ)つてや(ヤ)つて來(キ)る。それには「愛(アイ)路(ロ)、民(ミン)族(ジュク)協(ケイ)和(ワ)、防(ボウ)共(キョウ)」を説(セツ)いた満(マン)文(ブン)の標(ヒョウ)語(ゴ)が刷(ス)られてある。

第(ダイ)一(イチ)日(ニチ)の患(クワン)者(ジャ)た(タ)ち(チ)は、さ(サ)い(イ)は(ハ)ひ(ヒ)に(ニ)し(シ)て、雅(カ)子(コ)を困(クワン)惑(ダク)さ(サ)せるや(ヤ)う(ウ)な(ナ)も(モ)の(ノ)も(モ)ろ(ロ)な(ナ)か(カ)つ(ツ)た。彼(カ)女(ニョ)は、自(ジ)分(ブン)が今(イマ)や(ヤ)つ(ツ)てあ(ア)る(ル)こ(コ)の(ノ)政(セイ)治(チ)的(テキ)意(イ)義(ギ)と(ト)は(ハ)何(ナニ)で(デ)あ(ア)ら(ラ)う(ウ)と(ト)考(カウ)へ(ヘ)な(ナ)が(ガ)、か(カ)ん(ン)た(タ)ん(ン)に(ニ)は(ハ)癒(イ)り(リ)さ(サ)う(ウ)に(ニ)も(モ)な(ナ)い(イ)満(マン)人(ジン)の(ノ)病(ビョウ)人(ニン)た(タ)ち(チ)に(ニ)、せ(セ)め(メ)て(テ)も(モ)の(ノ)思(シ)ひ(ヒ)で(デ)、今(イマ)後(ゴ)の(ノ)養(ヤウ)生(セイ)法(ホウ)な(ナ)ど(ト)を(を)、看(カン)護(ゴ)婦(フ)に(ニ)通(ツウ)譯(ヤク)さ(サ)せ(セ)な(ナ)が(ガ)、こ(コ)ま(マ)か(カ)に(ニ)注(チュウ)意(イ)し(シ)て(テ)や(ヤ)つ(ツ)た。

看(カン)護(ゴ)婦(フ)は(ハ)二(ニ)人(ニン)と(ト)も(モ)奉(ホウ)天(テン)か(カ)ら(ラ)來(キ)て(テ)あ(ア)る(ル)の(ノ)だ(ダ)と(ト)か(カ)で(デ)、一(イチ)人(ニン)は(ハ)ま(マ)だ(ダ)若(ワカ)かつ(ツ)た(タ)が(ガ)、一(イチ)人(ニン)の(ノ)方(ホウ)は(ハ)相(サウ)當(タウ)の(ノ)年(ネン)配(バイ)で(デ)、産(サン)婆(バ)の(ノ)資(シ)格(カク)を(を)も(も)つ(つ)て(て)あ(ア)る(ル)。その看(カン)護(ゴ)婦(フ)た(タ)ち(チ)は(ハ)雅(カ)子(コ)の(ノ)注(チュウ)意(イ)を(を)半(ハン)分(ブン)ぐ(ぐ)ら(ラ)る(ル)に(ニ)し(シ)か(カ)傳(ツタ)へ(ヘ)な(ナ)かつ(ツ)た(タ)が(ガ)、そ(そ)れ(れ)で(で)も(も)満(マン)人(ジン)た(タ)ち(チ)は(ハ)、

「謝(シエ)々(ツク)、謝(シエ)々(ツク)！」

と雅(カ)子(コ)に(ニ)三(サン)十(ジュウ)べ(ベ)ん(ン)ぐ(グ)ら(ラ)か(カ)頭(カ)を(を)さ(サ)げ(ゲ)て(テ)歸(キ)つ(ツ)て(テ)行(イ)つ(ツ)た。

診(シ)療(リョウ)は(ハ)、一(イチ)時(ジ)間(カン)半(ハン)の(ノ)晝(チュウ)食(シキ)休(キウ)み(ミ)を(を)別(ワ)け(ケ)に(ニ)し(シ)て、午(ゴ)前(ゼン)十(ジュウ)一(イチ)時(ジ)か(カ)ら(ラ)午(ゴ)後(ゴ)五(ゴ)時(ジ)す(ス)ぎ(ギ)ま(マ)で(デ)か(カ)つ(ツ)た。そのあ(ア)ひ(ヒ)だ(ダ)に(ニ)雅(カ)子(コ)は(ハ)百(ヒャク)人(ニン)以(イ)上(ジョウ)の(ノ)患(クワン)者(ジャ)を(を)見(ミ)た(タ)わ(ワ)け(ケ)だ(ダ)つ(ツ)た。疲(ツカ)れて(テ)しま(シ)ま(シ)つ(ツ)た。け(ケ)れ(レ)ど(ド)も(モ)雅(カ)子(コ)は(ハ)、藥(ヤク)劑(ジ)師(シ)と(ト)事(ジ)務(ム)員(イン)と(ト)二(ニ)人(ニン)の(ノ)看(カン)護(ゴ)婦(フ)の(ノ)誰(ナニ)に(ニ)と(ト)も(モ)な(ナ)く、

「こ(コ)ん(ン)な(ナ)こ(コ)と(ト)で(デ)よ(ヨ)ろ(ロ)し(シ)い(イ)ん(ン)で(デ)せ(セ)う(ウ)か(カ)！」

と謙(ケン)讓(ジョウ)な(ナ)氣(キ)持(チ)で(デ)た(タ)づ(づ)ね(ね)た。

「さ(サ)う(ウ)ね(ね)、正(セイ)直(ジキ)に(ニ)い(イ)は(ハ)せ(セ)て(テ)い(イ)た(タ)ゞ(ゞ)け(ケ)ば(バ)、先(セン)生(セイ)の(ノ)、す(ス)こ(コ)し(シ)て(テ)い(イ)ね(ね)い(い)過(ス)ぎ(ギ)や(ヤ)し(シ)ま(シ)せ(セ)ん(ん)か(カ)し(シ)ら(ラ)？ だ(ダ)つ(ツ)て(テ)販(ハン)賣(バイ)の(ノ)方(ホウ)だ(ダ)つ(ツ)て、と(ト)つ(ツ)く(ク)の(ノ)昔(セキ)す(ス)ん(ン)で(デ)あ(ア)る(ル)ん(ン)で(デ)す(ス)も(モ)の(ノ)！」

と笑(ワラ)ひ(ヒ)な(ナ)が(ガ)ら(ラ)年(ネン)を(を)と(ト)つ(ツ)た(タ)方(ホウ)の(ノ)看(カン)護(ゴ)婦(フ)が(ガ)い(イ)つ(ツ)た。

「し(シ)か(カ)し(シ)、本(ホン)來(ライ)な(ナ)ら(ラ)ば(バ)あ(ア)れ(レ)ぐ(グ)ら(ラ)に(ニ)扱(アツ)つ(ツ)て(テ)や(ヤ)る(ル)べ(ベ)き(キ)で(デ)せ(セ)う(ウ)ね(ね)！」

「そ(そ)り(リ)や(ヤ)さ(サ)う(ウ)だ(ダ)ね(ね)！」

事務係の言葉に藥劑師が答へた。その藥劑師の方を見ながら、  
「皆さんはもう長く厚生列車に乗つてらつしやいますの？」

と雅子が聞くと、

「いや、僕や栗原君はまだ二週間ぐらゐですが、看護婦さんたちは大變ですよ、なにしろ最初から最後まで乗るさうですから。——もう幾日になる、三宅さん？」  
と藥劑師は若い方の看護婦にたづねた。

「もう五十幾日よ、だから、やつと半分すんだわけ」

「ほんとに、たいへんね！」

「でも面白うございますよ、働きながら滿洲見物が出来て」

と年をとつた方の看護婦が笑つた。

誘はれて、みんなも笑つた。

班員たちは、女の班長を頭にいたゞくことに對して、べつに不満を感じてゐる

風も見えなかつた。雅子は、それをありがたいことに思ひながら、

「皆さん、ごいつしよにお食事にもありますませうか。本来ならばお近づきのおしるしに、せめてお紅茶でも……といふところですが、——厚生列車ではどうですか、さういふことも出来ないんでせうか？」

「いゝえ、お紅茶ぐらゐは出してくれますわ。もつとも、お金は……」

といひかけて、年をとつた方の看護婦が笑つた。

「ちや、まゐりませう、皆さん！」

「おごちそうになるかな、——ねえ、塚本さん？」

「ウン、とにかく食堂へ行かう」

厚生列車は、あくる日、午前（じんむ）に神武屯、午後（わうてん）に黄金子の開催をすまして、暮れないうちに黒河（くわが）についた。こゝが汽車で來られる滿洲の北の果であつた。

黒河は相當の都會で、その必要がないので、厚生列車の催しものはなかつた。

乗組員たちは、しばらくの外出を許された。

雅子は、診療班の四人とともに散歩に出かけた。踊子の良枝もついて来た。驛から黒河の市街までは、かなり離れてゐて、そのあひだをバスが往復してゐたが、雅子たちは歩いて行くことにした。ロシア風の建物や支那風の建物が軒を並べて、いかにも北の果の國境の街らしい黒河の市街を抜けて、五人……いや、六人は、埠頭に出た。

目の前に、のびのびと廣大な大河が横たはつてゐた。

「黒龍江だ、黒龍江だ！」

「ソ聯が見える！」

まづ二人の青年が嘆聲をあげた。

さうだ、向ふ岸はソ聯であつた。ヅラゴヴェシチェンスク市の一角が正面に見える。赤い旗が夕日の中にひるがへるゲ・ベ・ウの營舎が見えた。右手に高い鐵骨

の塔があつた。落下傘部隊の練習飛降臺ださうだ、と事務の栗原青年がいつた。左の方には、あきらかにそれと想像のつくトーチカらしいものも見えた。

目を轉じて、こちら側を見る。數隻の美しい外輪船のほかに、支那船やボートや曳船やいかだが、おしあひへしあひするやうに、一ぱい並んでゐる。そのあひだで洗濯をしてゐる満人の女、のんびり釣糸を垂れてゐる白糸露人の男……。

「なあ、おい、栗原君、かつては三百年この河をはさんで、二つの國が唾みつゞけて来たんだからなア」

「さうだ、——しかし、どうだらう、この黒龍江の波しづかなることとは！」

「おれたちが、——おれたち日本の青年が、アジャの民の兄貴である誇と務を忘れさへしなければ、——なあ、栗原君！」

「さうだとも、黒龍江の波しづかなれだ！」

夕日映ゆる大河に向つて二人の青年は語りつゞけた。

埠頭の岸は楊柳の並木路で、青葉の下を、年老ひた白糸露人の男と女とが腕を組んで、ゆつたりゆつたりと歩いてゐた。

雅子は、ふと、目をとちた。

「……進太郎さんはどうしてらつしやるかしら？ ……あの人も、いま頃は、かうして奥さんや子供さんの手をひいて、どこかの道を歩いてらしやるかもしれない……。」

### 建設線の人々

新しい代表と總務長を迎へた厚生列車は、黒河から神武屯までひきかへし、そこから西へ、小興安嶺の頂を目ざして、いよいよ建設線コースに入つた。そこには家を忘れ妻子を忘れ、命を的に、鐵道建設の勞苦と闘ふ雄々しい男ら

が待つてゐる。

厚生列車よ、いそげ。

しかし、列車は、ただひとつの丘を越えるにも、その丘のまはりを幾度かぐるぐるまはりをし、いくつかのトンネルをぬけて、やつと次の峯の麓につく。と、また、こんどはその峯を越えるために、いくどか迂廻し、いくどかトンネルをくぐつて、さらにまた、より高い峯を仰がなければならぬ。さすがの厚生列車も、いまは喘ぎあえぎ上つて行かなければならなかつた。

「ほんとに、たいへんだつたでせうね、こんなところに鐵道を敷くのは！ 列車が上つて行くのでさへ、こんなにたいへんなのに……」

建設線などといふ名前さへも、正確には、この列車に乗るまで知らなかつた雅子であつた。自分のその迂濶さを、いくらかわびるやうな氣持で、かたはらで化粧をしてゐる大木美鳥に話しかけた。

この美鳥が、十年前に高木進太郎をたづねて来て、ぞんざいな言葉で雅子を不愉快にさせた女であることを、雅子は、いまは気がついてゐた。美鳥の方ではそれを忘れてゐるやうであつたが、むろん、雅子は美鳥にそれを思ひ出させる氣持はなかつた。

雅子に話しかけられた美鳥は、旅行用の小さい鏡臺から顔をあげ、窓の外に目をやつて、

「ほんとに……」

とお愛想に微笑しかけたが、ふと、窓外の景色に気がつくくと、

「けど、まア、この景色はどうでせう！ すてきちやございません、ねえ？」と目を輝かせた。

雅子も、さつきからその景色には気がついてゐた。

重疊たる小興安嶺も、いまは麓から頂まで若草と花とに覆はれてゐる。

「こゝ一二ヶ月が満洲の極楽だと言つた方がありますが、ほんとうね！ 私、まだ一度も内地では、こんなに壮大な美しい風景を見たことはありませんわ」

「ええ、ほんとうに……。私なんか、すいぶん内地でも旅行はしますけれど……」しみじみと美鳥がさういひかけた時、雅子は、はじめて、このひとは、いつた

い、どうした人であらうと、それを知りたいやうな氣持もした。

けれども、その時、列車は、この建設線での最初の驛——緑神についてゐた。

こゝは歸りに開催されるはずであつたが、それでもしばらくの停車時間があつた。

雅子は、つぎの室にある二人の看護婦を誘つて、ホームに降りた。——診療車

だけは、いつたんホームに降りて、外から廻らなくては行けなかつた。

雅子は、四人の班員とともに診療の支度にかゝつた。

午前十時、山神府驛についた。

こゝがこの建設線の現在での最尖端であつた。

小興安嶺の頂、——北緯五〇度二分のところにあつた。

そこに建設線の工事区はじめ、電気区、機關区、その他の事務所があつた。やつと建つたばかりの宿舎もあつた。また、北鐵時代の貨車をそのまま、従業員の家とする移動宿舎も、あたかも一つの部落かのやうに数多くたむろしてゐた。

建設線の従業員たちは、まだやつと地ならしをしたばかりの曠漠たる高原の砂地のプラットホームに列を正して、厚生列車を迎へた。この二年近く自分等の汗と血もて、こゝまで敷きのばしてきた鐵路の上を走つて、自分等を慰め勵まして來てくれた厚生列車を、一様に感激の目をもつて迎へた。

おとづれた人々もまた、窓といふ窓から顔を出し、白熱の地上に並び立つ雄々しい同志たちに、熱意をこめて旗を振り、帽子を振つた。

代表が地上に降りる。と、二列横隊に並んだ従業員の列の先頭に立つてゐた男——みるからに偉丈夫風の丈の高い逞ましい男が、つかつかと代表の方に向つて

進み出た。代表もまた、その男の方に歩みより、二人は同時に擧手の禮をかはし、その手を強く握りあつた。

「ごくらうさまです、工事區長！」

「ありがたう！ 皆さんこそ、はるばると、ごくらうさまです！」

代表は、乗組員の幹部を工事區長にひきあはせる。工事區長はまた、電気區長、機關區長、その他の人々を代表たちに紹介する。

打合せはその場ではつた。

厚生列車の催しは滿人を相手にする演藝からはじめられた。同時に、販賣班も診療班も活動を開始した。

雅子は、麻地でつくつた夏のブラウスの上に、純白の診察着をかさね、診療机を横にして、しづかに椅子にかけた。

「塚本さん、お薬の方は大丈夫でしたでせうね？ ——三宅さん、トラホームの

子には今日は一人残らず、この場で手を洗はして下さい、目よりもさきに手をね！ これからも必ずさうするやうにとよくいひ聞かせて。それから大場さん、あなたは……」

一さいの指圖はをはった。患者を待つばかりとなつた。患者は一時に十五六人もおしかけて来た。が、それらが順々に用をすまして歸つてゆくと、そのあとはバツタリと途絶えてしまつた。

「おやおや、さつぱり来ませんね、どうしたんでせう？」

「いや、もともと人が少いんですよ、かういふところですからね、部落だつてそんなにあるはずがありませんし、——まあ、いまぐらゐれば多い方でせう」

「それに従業員のためには醫療の設備があるんですからね、なにしろ、はげしい命がけの仕事ですから、なにはおいても醫療——特に外科の用意が必要なんです。それがあの移動宿營車の一つに出来てゐるんださうです」

「なら、いゝけど、——ぢや、今日は私たちも、この高原で、ゆつくり」

といひかけて、雅子は、ふつと口をつぐんだ。

その時、ひとりの人物が、ぬうツと診療車にあらはれたからである。

雅子の目を追つて、あとの四人もその方を見た。

満人の女であつた。姑娘と呼ぶにふさはしいまだ若い娘である。ふつくらとしたまる顔の、まづ可愛らしい娘であつた。厚生列車を見ようとして、おめかしをしたのであらう、腕の短い真赤な夏の支那服を着て、まがひものの耳環をはめてゐた。しかし、その入つてきかたが、まつたく、ぬうツとしてゐたので、ちよつと呆れたかたちで、

「おい、おまへ何だい？」

と事務の栗原が日本語で聲をかけた。

すると、満人の娘もまた、たどたどしい日本語で、

「コレ、オ医者さま……」

と大形の名刺を、栗原事務員の方へ、——まるであぶないものにでも觸るやうに、左の手だけをつき出して、わたさうとした。

「お医者さまは、そちらだ。が、何だい、こりや？」

栗原事務員は、娘がわたしたとほりに、なにか書いてある名刺の裏を上に向けたまゝ、雅子にとりついた。

雅子は、うけとつて、それを見た。しつかりとしたペン字で、まことに恐縮ながら、この女の診察を少しく氣をつけてやつていた。わけまいかといふ意味のことが、ていねいな候文で書かれてあつた。雅子は、その文面と、いまは自分のそばに来て、あひかはらず「にゆうツ」と立つてゐる満人の娘の顔とを、見くらべながら、なんの氣なしに名刺の表を見た。そして思はず「あ！」と小さくつぶやいた。名刺には「山神府工事區長、高木進太郎」と讀まれた。しかし、その小さい

驚きの聲は、さいはひ、あとの四人に氣づかれるほどではなかつた。

「さあ、では、みませう」

依頼のとほり、雅子は、その満人の娘の診察をはじめた。が、雅子は、すぐとそれに氣がつき、なにかなし自分自身の胸がふるへるのを感じながら、

「さあ、そのカーテンのかけに……」

と手術用の寢臺のあるところを指さした。

娘はそれをこわがる風であつたが、年をとつた産婆の看護婦に手をとられるとそれ以上さからふことはしなかつた。

カーテンのかけには、娘と雅子と産婆の大場看護婦だけが入つた。

三十分の後、——ちやうどもう正午であつた。雅子は診療車を出て、はじめて山神府のフォームに降りた。あとの四人が食堂へまゐりませうと誘つたが、いまは少しもほしくないからとことはつた。ちやうとそこへ通りかかつた従業員らし



い一人の青年を呼びとめて、工事區長の高木進太郎さんは、どこにおいででせうか、と、たづねた。

「工事區長ですか、——さあ、事務所か宿營舎かだらうと思ひますが、御用だつたら探して、ませうか」

「いゝえ、——その宿營舎といふのは、どちらでせうか」

「御案内ませう」

「すみません」

青年のあとについて、工事區の宿營舎をおとづれた。滿洲松の、木の香も新しい家であつた。思ひのほか立派であつた。

「こゝに皆さん今後すつとお住ゐになるんですの？」

「いや、これはこゝの工事中だけです。こゝがすむと、そのつきへ、そのつきがすむと、またそのつきへ、さきからさきへと工事をすゝめて移動して行きますか

ら、——こゝは驛員の住居になるでせう」

「工事區長さんといひますと、どういふことをするんですの？」

「この建設線區における現場の最高指揮官でわけですね」

「えらいですね！」

「えらいですよ、——殊に高木さんには、みんな心服してゐます。口數も少いし特別に優しいことをいふわけでもなく、どこがどうといふことは言へないんですが、それでゐて、どこかしら大きくて、あつたかくて、頼もしいところがあるんですね、——出來た人ですよ」

「皆さんを叱るやうなことはありませんの？」

「叱らないですね、——叱る時は、ひとことです」

「ひとこと？」

「ばかやらうツ、——ちぢみあがるですよ、みんな」

「ホ、。なぐるやうなことは……？」

「ないですね、なぐられる必要がないんですよ、みんなよくいふことを聞くから——建設線に働く男たちは、みんな兄弟みたいなもんですからね！」

宿舎は、まん中に長い通路があつて、その両側に、一人一室の割で、六疊から八疊ぐらゐの部屋が、ずらりと並んでゐた。上り框には戸も障子もないので、部屋の中は通路から、まる見えであつた。みんな厚生列車に出かけてゐると見えて、どの部屋にも人の姿はなかつたが、部屋のつくりが全部おなじであるにもかゝらず、住む人の個性に應じて、それぞれ變つたおもむきを見せてゐるのが、雅子に面白く思はれた。

たとへば、正面の窓さにはおかれた机ひとつでも、その上に飾られたものは、愛兒の寫眞、愛妻の寫眞、乃木大將の肖像、映畫女優のプロマイド、花、植木鉢……と思ひ思ひであつた。

むやみと飾り立てた部屋、殺風景な部屋。

愉快だつたのは、主のゐない空っぽの部屋に、頭の毛がインデヤンの頭かざりの羽のやうに長く、そのほかはウヅラのやうな形や羽色をした野鳥が、留守居のおばあさんそつくりの形で、主人の座布団の上に、ちよこんと止つてゐることであつた。それがひどく面白かつたので、

「あらあら、あの鳥……」

と雅子が立ち止つて見てゐると、きふにビョンビョンと疊の上を跳んで来て、ヒョイと雅子の肩の上にとまつた。

「まア、よく馴れてますのね！」

「ええ、そいつは、この部屋の男が、この四月でしたか三月でしたか、まだ今のやうに暖くない頃、森でござえてゐるのを拾つて来て、飼つてゐるんですね、すつかり馴れちまつて、夕方われわれが仕事から歸つてくると、あたし、一

人で淋しかつたわよウ、といふみたいにな、さうして誰にでも甘えるんですよ」  
 雅子は思はず微笑をもらった。青年のその女の聲いろをかしかつたが、かうした人里を遠く離れた北方の高原で、妻とも子とも別れて働く男たちが、かうして小鳥や花に、せめてもの思ひを託してゐる姿が、ありありと忍ばれたからであつた……。

進一郎の部屋は、一番の奥であつた。

「ここですが、——あ、ゐないな。——池田さん、工事區長は知りませんか、お客さんなんだが」

青年は、進太郎の一つ手前の部屋の上り框に、長靴のまゝひつくりかへつてゐる男を見て、その男に聲をかけた。池田さんと呼ばれたその男は、お客さんと聞いて、くるりと起きなほつたので、雅子が會釋をすると、  
 「やあ、いらつしやい！」

ビヨコリと頭をさげ、雅子の顔をチラと見たが、とたんに立ちあがつて、青年に、

「工事區長は厚生列車の食堂ぢやなかつたか」

「いや、ゐないよ、食堂には。——おれもいま食堂から出てきたんだ」

「さうか。——ぢや、おまへ機關區に行つてみる、おれ事務所を見てみるから」

それから雅子に、

「どうぞ上にあがつてお待ちになつてゐて下さい、その押入れのカーテンをあけると、座布団がありますから、どうぞ！」

二人の男は出て行つた。

ひっそりとした宿營舎の中に、いまは雅子だけがゐた。さつきの野鳥を別とすれば……。

雅子は進太郎の部屋の上り框に腰をかけたまゝ、その部屋の中を見た。八疊敷

らしかったが、じゆうたんのかはりに、部屋いっばいに毛布が敷かれてあつた。正面の窓ぎはに頑丈な机があつた。机の上には習字用の大きな筆と、わりに立派な硯があつた。右手の壁ぎはに白木のまゝの本箱、その箱は大きかつたが、中に入れられた本の数は、わづかに五六冊だつた。みな専門の本らしかつたが、一冊だけ岩波文庫の萬葉集の註釋のあるのが目立つた。壁には繪葉書大の寫眞が一枚、鋌で止められてある。彫刻の女の像で、展覽會の出品作品らしく、泉と題され、作者の名が武井久と印刷されてあることは、のちに部屋に上つてから知つた。

左手が押入れ、まだ戸もフスマもなく、まつ白いカーテンがひかれてあつた。以上のほかには何の飾りも何の道具もなかつた。道具どころか、この部屋には、チリひとつゴミひとつ見いだせさうにもなかつた。すべてが一糸みだれずキチンと整頓されてゐた。それは何かしらヒヤリと寒さを感じさせられるほどの、整然たるかたづけやうであつた。

——これがほんとに進太郎さんのお部屋かしら？

雅子は信じられない氣がした。

どつしりと、おちついた、規則ただしい足音が近づいて來た。

なんとといふことなしに雅子の胸はふるへた。

足音の主が雅子の前に立ち止つた。

雅子は立ちあがつた。相手の男を見あげた。進太郎であつた。

「進太郎さん！」

相手の顔を見あげたまゝ、雅子は泣くやうな笑ひ方をした。

相手は、それこそ(棒のやうに)そこに立ちはだかつて、ちつと雅子の顔を見つめた。ひとことも口には出さないで、まつすぐに見つめた。三十秒もそのまゝの姿をつづけたのち、底力のある、かすれたやうな聲で、

「……マアちゃん？」

と、たづねた。

「ええ、ええ、そのマアちゃんよ！」

笑つたとたん、ポロリと涙がこぼれた。ついとそれを右手の甲ではらつて、そのまゝその手を進太郎の方にさし出した。

「しばらく！」

進太郎は、しかし、雅子のその手を握らうとはしなかつた。

「……どうしてまた、こんなところへ？」

「そんなにお驚きになることないのよ、私、これで厚生列車の診療班長よ」

「厚生列車の……？」

「さうよ、——あッさうさう、さつきの娘さんね、満人の娘さん」

「ああ」

「五ヶ月よ、たいせつにして上げないと」

「さう、ありがたう。しかし、厚生列車の診療班長とは……」

進太郎はまた首をひねつたが、やがてはじめてキツパリと、

「まあ、さあ、おあがんなさい！」

長靴をぬいで、自分がさきになり、押入から座布団を出した。

雅子と進太郎とは、そのひえびえとするやうにキチンとかたづいた部屋に、向ひあつてすわつた。どちらもしばらくは口をきかなかつた。雅子はモヂモヂしながら、ニコニコしてゐた。進太郎は、どつかりとアグラをかいて、さうした雅子の様子を見つめたまゝ、まだ解せないといひたげな顔であつた。そして、とうとうそれを口に出した。

「ぼく……どうも……まだ信じられないやうな気がするんだが」

「ホ、。ちや、おわかりになるやうに、かんとんにお話ししますわ。ええと、まづ、私ね、あなたがすゝめて下さつた結婚、しませんでした。理由はありませ

ん。要するに、みんなが騒ぐほど、私自身には、あの結婚に魅力を感じなかつたんですわ。父と母との一歩々々ときびき上げて行つた幸福、そんな風な空気の中で育てあげられた私には、そんなにはじめツから、ちやんと出来あがつた幸福なんてものは、なんだか自分とは縁の遠いもののやうに思へましたし、つまんなかつたんですわ。そんなもの貧乏人根情だなどといはれれば、それまでですけど」

「……」

「それで、私は一年だけ待つていたゞくことにしました。そしたら、こんどは向ふの方の御歸朝がおくれて、私が女子醫專の三年に上つた春に歸つておいでになりましたの。けど、——さうなると、こちらは學校の方に未練が出てきてね、いつそ、卒業してからと願ひしてみました」

「ウン、すると？」

「ホ、。それつきりよ、ほかの方と結婚なさいましたわ、もつと良いお家のお

嬢さまと。——進太郎さん、こんどはあなたの番でせう？」

「あゝ、僕も、しかし、自分のことについては、何もいふことはありませんよ。

ごらんのとほり、山の男になつてね、元氣にやつてゐます」

「御不自由でせうね、なにかと」

「なあに、慣れてるから……。それより、あんたこそ、滿洲へはまたどう思つて、

——いつたい、いつ？」

「ちやうど一年よ、もう……。ひどい方ね、進太郎さん、私、奉天で方々さがしたわ、すいぶん」

「奉天？ あゝ、奉天はもう……とづくに……。で、これからもずつと滿洲ですか」

「するい方！ 私にばかりしやべらして」

「いや、さういふわけぢやないが、——どうもこりやお茶も出せないな、みんな

が厚生列車へ行つちまつて」

「お茶なんか……。けど、ほんとに御不自由でせうね、こゝにゐらつしやるあひだは、すつとおひとりですの？」

「こゝにゐる時も、どこにゐる時も、いつだつて僕はひとりですよ」

「ほんと？」

「はゝゝ。ほんとにもウソにも……」

「なら、どうしておもらひにならないの、進太郎さんだつて、もう三十五かですう？」

「マアちゃんは何つになつたんです？」

「ぬけ目がなくなつたのね、あなたは！ 昔はそんな方ぢやなかつたわ、もつとかう茫洋として……」

「茫洋か、そいつはい、な。そりやしかし今だつて……」

「私ね、進太郎さん、あなたが家の母にお話しになつたことを、それから三年も四年も経つてから、母から聞きましたわ」

「マアちゃんを僕の……あれですか？」

「さうよ」

「……」

「なせ横をお向きになるの？」

「雅子さん！」

あぐらをかいてゐた進太郎は、この時、きちんとすわりなほすのと同時に、かすれたやうな聲で相手の名を呼んだ。それがキツカケであつたかのやうに、ポツリポツリと語りはじめた。

「……ぼく、獨身です、最初ツから、すつと。——理由はありません。しひていへば、機会がなかつた、べつに是非ほしいとも思はなかつた、めんだうくさくも

あつた、それだけです、はつきりといへる理由は。——ぼくが三十五のこの年になるまで、女房をもたなかつたことと、あなたとを結びつけて考へるのは、あなたの前で、ことに今の場合、とても都合はいゝだらうが、正直なところ、そんなに自分ではつきり意識してゐたわけぢやありません、今までは。——しかし、雅子さん、あなたに今こゝで逢つてみて、なんだか僕は、この十年間ずっと、かういふ日を待つてゐたんぢやないかといふやうな気がするんです」

色くろぐろと大陸の日にやけた大の男が、額の汗をこすりこすりコツコツと語る言葉を、雅子は、むしろ、非常に美しい音楽をでも聞くやうに、こゝろよく聞いてゐた。

「で、ぼく、あなたに……いや、その前に、はつきりおことはりしておかなければならないが、ごぞんじのやうに僕は平凡な男で、特別の修養なんかもなにひとつやつてゐない人間です、酒も飲むし、かういふ生活をしてゐれば、時と場合に

よつて遊びもする、——だから、あんまり辛い點をつけられると、むろん、落第だが、普通に、つまり、あなたが僕に聖人君子を望みさへしなければ、いままでにも人に恥かしいやうなことはしなかつたし、今後だつて、それは誓つてもよいと思ふんです。それから……」

「ちよつとお待ちになつて、進太郎さん、それなら、私、ひとつだけお聞きしたいことがありますわ」

「何ですか？」

「さつきの人ね、さつきの満人の娘さん」

「ええ」

「あの人は、さつきもいひましたやうに、近くお母さんになりますよ、からだは大きいけれど、まだホンの子供としか思へないのに。——あの人は、あなたとは何ですか？」



「……」

「こんなことお聞きしては、いけないのかもしれないけれど……」

「いや、そりやかまはない、あの子は僕が保護してやらなければならぬ——ならないといふより、かわいいさうな娘です」

「と、おしやると？」

「それだけでいゝぢやないか、雅子さん、ぼく、きらひだ、さうスミからスミまで、ほじくるのは」

「さう、ごめんなさい、よけいなことを聞きましたわ」

「怒つたの、マアちゃん？」

「いゝえ」

「さうすると、マアちゃん、ぼくが今お願いしかけたことは……」

「私ね、進太郎さん、もう二十九よ」

「……どういふ意味なの？」

「結婚するからには悔ひのないものでありたいの、おくびやうといはれても、やせがまんといはれても、かまひません。年をとつただけのことはある結婚でなけりや、もういままさら、したかありませんわ」

「あの満人の娘を問題にするわけですね？」

「なまじひ知らなけりや、よかつたと思ひますわ。けど、知つてしまつた以上、私としては、やはり、はつきりしていた、かなくちや……」

「さう？ ……ちや、仕方ありません」

進太郎は前歯で下唇を噛んでゐた。その唇に血がにじみ出た。けれど、彼は立ちあがつた。

「マアちゃん、それはそれとして、まあ、ゆつくりして行つて下さい。いまお茶でも運ばせるから。何だつたらお夕飯もこゝで食べて行きなさい、工事區の連中が釣つてきたドロハヤやカワマスがあるから、あいつを食堂でフライにさせて上

げよう。——ねッ、興安嶺の頂で食べたカワマスの味、とてもよかつた……なんて、ちよいとよいおみやげばなしになりさうぢやないか。は、は、——ちや、ばく、わるいけど、ちよつとだけ失敬します、守備隊の人と約束があるから」

進太郎はまた長靴をはき、うつむきかげんに脊をまげて、例のとほりの足どりで、ゆつくりと出て行つた。

雅子は、うなだれたまゝ顔をそむけ、しづかにその足音を聞いてゐた。足音はまもなく宿營舎の外に消えて行つた。雅子は顔をあげて、壁の寫眞を見た。泉と題された女の像の彫刻の寫眞で、武井久といふ人の作品であることを、この時に知つた。その武井久といふ男が、進太郎の佐世保時代からの親友であることは知つてゐたが、その人が彫刻家であることは今はじめて知つた。その女の像の顔は大木美鳥によく似てゐた。ふとしたら、ほんとに美鳥が武井氏の作のモデルなのかも知れない。

いま、そんなことはどうでもよい。

けれど、雅子は、この場合、さういふものをでも見てゐるほかはなかつた。なにも考へたくなかつた。考へると自分がすわつてゐる疊もろとも地の底へ落ちこんで行くやうな氣がした。

つぎの部屋でコトコトと音がした。さつきの池田と呼ばれてゐた男が、お茶をかゝへて、その部屋から出て來た。

「さあ、どうぞ、山々中（やまなか）で何にもありませんが」

池田は上り框のところからお盆ごとお茶を雅子の方につき出した。お盆の上にはお茶と一しよに、厚生列車の販賣車で買つてきたらしいヨウカンが、つつみのまゝ出されてあつた。池田はそのまゝ上り框に腰をかけて、話しかけた。

「ちよつと失禮します、はく池田三郎といふものです。高木さんとは牡丹江時代からすつと建設の方で一しよで、特別にお世話になつてゐるもんです。——さつ

きから實はお茶の支度をして、となりの部屋でマゴマゴしてゐたんですが、どうもお話の様子で出にくかつたもんで……失禮しました」

「いゝえ、こちらこそ、ほんとに、いろいろと……。では、わたくし、これで……」

「いや、ちよつとお待ち下さい、是非あなたのお耳に入れたいことがあります。いまのお話の、あの満人の娘のことですが」

「……？」

「あれはね、奥さん……いや、失禮、どうも何とお呼びしてよいか……」

「申しおくれました、わたくし、室伏と申します、どうぞよろしく……」

「いや、恐縮です。——でね、室伏さん、あの満人の娘ですが、あれは工事區長……いや高木さんとは全然なんの関係もないんです、ええ、絶対に！」

「と、おつしやいますと？」

「といふのが、——いや、この話は實は工事區長と僕よりほかは誰も知らないんですが、——だからこそ、工事區のものの中にさへ、あの娘と工事區長が何か關係があるやうに思つてゐるものもあるんですが、實際は、ないんです、ないんです、絶対に！」

「もう少し詳しく伺はしていただけませんかしら？」

「これ以上お話ししなげりやいけませんかな、われわれ山の男たちのあひだではもうこれだけで十分に通じるんですがな」

「ですけど、わたくしは俗世間の女ですから……」

「いや、恐縮……。ちや、何でせう、あなたは、あのノウタリンの娘が自分の口から、このお腹の子の父親は……なんて、自慢さうに言つてるのを聞かれたといふわけですか？」

「ええ、まあ、でも……」

「いや、いゝです、いゝです。わかつてます。——ねえ、あなたは気がつかれなかつたですか、あの厚生列車の停つてゐる向ふツ側に、廣々とした草原があるでせう、いま一ばい花の咲いてゐる——？」

「ええ」

「あの原の中に一本の木の墓標が立つてゐるはずですが、——？」

「さあ」

「あれは、やはりこの建設線で僕らと一しよに働いてゐた鈴木といふ青年の殉職の碑なんです、その鈴木といふ青年は、實にいゝ奴でね、工事區長なんか特に目をかけてやつてゐたんですが、工事中に自動車事故のために殉職したんですよ。まだやつと二十二の若さでしたが、で、その青年は……」

## 血と地

いまは雅子が自身で進太郎を探さなくてはならなかつた。

彼女は池田三郎に教へられたとほり、まづ兵隊さんのテントをおとづれた。廣漠といふ語を自乗も三乗もしなければ、気分が出せないほど廣漠たる、小興安嶺の頂の驛構内の一角の、かんかんと北滿の夏の太陽が照りつける砂地の上に、二張のテントが張られてゐる。そのテントを、まづ雅子はたづねてみたのであつたが、進太郎はもうそこにはゐなかつた。山神府の假の事務所をたづねてみた。そこは北鐵時代の貨物車の内部を改造して、そのまゝ事務所に使はれてゐた。そこにもゐなかつた。やはり北鐵時代の貨車で、いはゆる移動宿營車と呼ばれる機關區の人々の家も二三はたづねてみた。その(貨車のお家)には、車体の側面に借段

があつて、上ると、すぐに通路、そこにはストーブがおかれてある。通路の両側が部屋で疊が四枚づつ敷かつてゐた。部屋には、ちやんと押入れもあれば、茶ダンスなどもおかれてあつた。そして、そのお部屋に今は女の人も子供もゐた。季節もよくなり、情況もそれが許されるやうになつて、夏の間だけ招致すること許された従業員の家族たちである。奉天や哈爾濱や旅順あたりの都會地から、一年ぶりか二年ぶりに、山で働く夫に逢ひに來た人々である。その人たちの姿はみるからに何とも愉しく幸福であつた。鐵道建設の苦勞はさることながら、その苦しみのかげには、かうした美しい喜びと幸福もあるのだ。この人々のこの愉しげな(貨車のお家)の生活に比べたら、都の人たちのキャンプ生活などは、ばかばかしいみたいないな、お笑ひぐさだ……。雅子はそんなことまで考へたりした。が、進太郎の姿はそこにもなかつた。

厚生列車の食堂にも行つてみた。代表や總務の室ものぞいてみた。

雅子は、なにがなんでも進太郎に逢つて、ひとこと言ひたいことがあつた。でない、明日の朝はもう、この厚生列車は、小興安嶺の頂の驛を去つて、東へ下るのである。

けれど、進太郎はゐなかつた。

仕方なく列車の自分の室に歸つた。踊子の良枝にひきずりこまれて、それなり、するするに自分の室にしてゐる日人演藝班婦人部室には、今日は夜分も演藝の催しがあるので、良枝も、美鳥も、マンザイ師の妻も、三味線ひきの女も、顔にハシカチをのせて午睡をしてゐた。雅子は美鳥のそばに行き、その枕もとのところ、そつと腰をおろした。列車の窓じきに片肘をつき、見るともなく目を窓の外にやつた。夏草の茂る廣々とした原が見えた。一本の高い木標が目についた。

「あ、あれだわ」

雅子はまた腰を浮かした。午後四時、日はまだ高く、まぶしく照りつけてゐる。

つば廣の帽子をかぶつてフォームに降りた。その砂地のフォームを歩いて、そこより一段と高臺になつてゐるその原に上つた。春と夏の短い北滿に、神は一時に喜びと美とをあたへたまふのであらうか。オキナグサ、タンボボ、ヒナゲシ、アヤメ、オニユリ、ヒメユリ、ノバラ、シヤクヤク、キキヤウ……。そのほか名も知らぬ花、花、花……。北滿の野は今まさに花におほはれてゐる。

雅子は、キキヤウとヒメユリの一枝づつを折つて、その木の墓標の前に立つた。その若くして職務のために去つたといふ青年の名が、進太郎の手で、筆ふとぶとと記されてあつた。くせのない力づよい立派な字であつた。進太郎が朝夕いそがしい暇をぬすんでは習字をしたり、寫經をしてゐるといふ事實を、雅子は池田三郎から聞かされて、そこに自分がまだ知らなかつた進太郎の別の面を見るやうな思ひがあつた。

——あの人は私が知つてゐるより、もつと立派な人なんだわ。私はあの人をた

ゞ、親しめる人、なつかしい人。としてのみ考へてゐたけれど、やはりあの人のもつと尊敬してよい人だつたんだわ。

さう思ひ、むせかへるやうな喜びと幸福感に、雅子は胸がふるへ、しみじみと生きることの喜びを感じた。

墓標の前には一對の花瓶があつた。ビールの空瓶であつた。瓶には水が一ぱいに満たされ、まだ新しい野の花が活けられて、照りつける日の中にも生々としてゐた。

——では、あの人たちは、はげしく忙しい仕事のあひだにも、職務に殉じた同僚のことを忘れず、かがさずかうしてお参りをしてゐるんだわ。

さう思ふと、雅子はまた、單純で美しい山の男たちの世界を、そこに見るやうな思ひがして、自分もまた花を添へ、墓標の前に深く額づいた。

墓標の前から立ちあがると、しづかに廻れ右をして、雅子は、はるばるとつづ

く夏草の野に目をやった。と、そこから三メートルばかりの草むらから、ゆらゆらと紫の煙が立ちのぼつてゐるのが見えた。

——おや、あんなところでタバコをすつてる人がゐるんだわ。のんきな人！あれこそ、厚生列車で若い人たちが歌つてゐた、お花島で午睡するんだわ、愉快ね！

雅子がさう思ひながら微笑してゐると、その愉快なタバコの主が、あ、あ、あ、あア……と大アタバコをしながら、くるりと半身をもたげた。

「あ！」

進太郎であつた。この「あ！」といふ聲は、雅子と進太郎の両方の口から同時にもれた。

が、雅子はさきに、つかつかと相手の方に近づいて行つた。進太郎も立ちあがつた。立ちあがつて、その場を動かさず、近づいてくる雅子の顔を、まじまじと見

まつてゐた。宣告をうけるのは、おれの方だ、とでもいひたげな顔であつた。

「進太郎さん！」

雅子は右手を進太郎の方にさし伸べた。進太郎は、その美しい白いきやしやな手と、雅子の顔を見くらべて、ためらつてゐた。こいつ、おれをまたからかつてるんぢやないかな、さういふ顔いろであつた。

「進太郎さん！」

もう一度さう呼んで、右手をさし伸べたまゝ、雅子は更に進太郎のそばによつた。進太郎は、雅子のその手を、弱く、むしろ、臆病に握つた。雅子の方が力をこめて、

「進太郎さん、私、すっかり聞きました、池田三郎さんに、鈴木さんのこと、あなたには鈴木さん……」

「およし、もうその話は。鈴木正之は、あの満人の娘を弄ぶつもりは絶対になか

つたんだ、結婚するつもりでゐたんだ、それをおれは信じてゐる。かはいさうに、あいつは、原因だけを蒔いて結果を刈りとらないうちに死んちまつたんだ。それを責める資格は誰にだつてないよ。ところが、あの娘の父親や部落の連中……ばかりではない、この建設線で働いてゐる苦力たちまでが、さういふことで日本人を誤解したり、非難したりする。誤解する奴が悪いといへばそれまでだが——しかしね、マアちゃん、僕は日本がアジャの盟主であることを絶対に信するんだよ。そして日本人はアジャ民族の長男なんだ、兄貴なんだ。兄貴には兄貴の誇りとも義務がある、大國民たるの誇りと義務！ それにね、マアちゃん、アジャ民族はおなじ血の色をもつてゐる上に、おなじアジャといふ地の上に生きてゐるんだせ。血と地につながる民族が愛しあはないといふ法はないよ。——ぼくは一度あの娘を女房にしようかと思つたことも實はあるんだがね、しかし理窟は抜きに僕は、自分の女房は絶対に日本人でなくちやならん、と定めてゐるんだ。民族協和は僕

の理想だけど、それと結婚は別なんだ。すくなくも僕の子孫は純粹無垢の大和民族でありたいんだよ」

「だけど、なせ、あなたはそれを私に……」

「むろん、かくすつもりはなかつたよ、けどな、マアちゃん、僕としては、あの場合、あんまり僕に文句をいはせないで、だまつて信じてもらひたかつたんだよ。

これは山の男の考へ方かもしれないけれど」

「わかりましたわ、進太郎さん、それでは私もあなたに倣つて、もうたくさんは言ひません。——ひとことだけ、ねッ？ 私、自分が何のために満州にやつて来たか、一夫なんかは、あの子一流のカンで、それをあなたと結びつけて考へてゐたやうですが、私は自分ではそんなこととは思つてゐました。——けど、やつぱりさうだつたんですわ、私、それを厚生列車に乗つてから考へはじめたんですけど、黒河でアムールの岸に立つた時、はじめてどうもさうらしいといふ氣が



して来たんですわ。それからこゝに来て、はつきりわかりました。進太郎さん、私ね、あなたを探しに満洲へ来たのよ。——人間の心つて、へんね！——さつきあなたのお話ね、これが私の御返事ですわ」

「ありがたう！」

「それから、あとは事務よ、ねえ、進太郎さん、私、どこでお待ちしてればいいの？ 満洲にゐるとおつしやれば、ゐますわ」

「しかし僕は、この小興嶺の峰に汽車を走らせるまでは、自分の體ぢやないんだが、——今年中には必ず假營業までには漕ぎつけさせるつもりだが、——？」

「なら、私、一度東京に歸つていゝかしら？ 弟や妹たちのことも氣になりますし、ちよつと家を整理しなげやならないので……」

「東京にお歸りなさい、僕もこの霍黒線が開通して仕事に區切りがついたら、一年か二年ばかり東京で少し研究したいと思つてるんだから、——早ければ今年の

末、しかし、おそらくは來年のお正月、きつと歸ります」

「あと半年ね！……そしたら、私、もう三十になつてゐるわ」

「ぼくは三十六」

「おたがひに十年も——結婚だけについていへば、まはり道をしてゐるんですから、それだけの甲斐はあつたといふやうな、よい生活をしませうね！」

「ほんとうだ、ぼくも努力する！」

「私も……」

二人は話のあひだに、いつとはなしに手をはなしてゐたが、この時、おたがひに顔を見あはせてニッコリとした。そして雅子は、むしろ、いたづらッ見みたい、ニコニコ顔でまた右の手をさし出した。と、こんどは進太郎も力をこめて、その手を握つた。雅子は相手の手に力を感じたとたんに、チラと相手の顔を見あげたが、すぐ顔をそむけ、うつむいたまゝ、

「進太郎さん、あなたはイソップの話にある樫の木よ、私はツタカツラ……や  
つばり、女ね、よっか、れるものがほしかつたの」

言つてゐるうちに、雅子の目には、みるみる涙がぬふれ、つと顔を進太郎の幅  
の広い胸にうづめた。進太郎は、雅子の脊を優しく撫でながら言つた。

「さあ、いまの約束を守つて、おたがひに十年ムダに年をとらなかつた證據を見  
せることにしよう。ぼくはこの建設線の工事區長、マアちやんは厚生列車の診療  
班長！ ねッ？」

雅子は、つづけさまに二つ、コックリをして、ついと進太郎のそばを離れた。

「雅子篇」 完結

出文協承認お10205號

昭和十七年十一月一日印刷  
昭和十七年十一月五日發行

(八、〇〇〇部) 定價金壹圓五十錢

送料 十二錢

愛  
有所權版

著者 田郷虎雄

發行者 東京市芝區新橋四ノ四六  
出文協會員一三八〇三三  
芳武昌治

印刷所 大蔵市浪速區櫻川一ノ〇三二  
翼賛出版協會印刷部

發行所 東京市芝區新橋四ノ四六  
振替東京一七八八一七番  
電話芝 三三三四番  
翼賛出版協會

配給元 東京市神田區淡路町一ノ九 日本出版配給株式會社

95  
120

終



Kashu